

令和 6 年度 他自治体学校視察報告書

●概要

目的…複式学級が発生している小規模校と、児童数増を想定して設計された過大規模校を視察し、それぞれの長短を検証することで、本市の小中学校適正配置基本方針策定の参考とする。

視察日…令和 6 年 9 月 13 日(金)

視察者…守谷市通学区域審議委員 6 名、守谷市教育委員会事務局 5 名

視察先…

常総市立五箇小学校(小規模校)

学年	1	2	3	4	5	6	特別支援	合計
普通学級数	1	1	1	1		1	2	5(普通学級)
児童数	1	9	12	11	11	5	2	51



つくばみらい市立富士見ヶ丘小学校(過大規模校)

※特別支援学級数:9(人数は、各学年に割り振り済み)

学年	1	2	3	4	5	6	合計
普通学級数	6	6	6	6	6	5	35
児童数	184	211	207	198	213	193	1,206



●視察結果

常総市立五箇小学校（小規模校）

◇視察内容

- ・1,2年生の図工授業及び5,6年生の総合学習授業の視察
- ・教育委員会から常総市立小中学校適正配置実施計画について説明
- ・質疑及び意見交換

◇複式学級が存在する学校としてのメリット、デメリット

	学校運営面	学習面	生活面
メリット	・特になし	・（複式学級のため）単学年だとできないグループ学習が行うことができる ・（少人数のため）児童が意見を出しやすい	・（複式学級にすることで）児童一人にかかる係活動などの負担が減る
デメリット	・教員数が減るため、一人にかかる校務分掌の負担が大きい	・加配教員がいないと学年により、学習内容が異なるため、指導が複雑	・人間関係が固定化されやすい ・単学年での思い出が作りにくい

◇その他【学校】

- ・1年生が1人しかいないが、1学級として編成可能であるため、担任の先生を配置している。
（授業については、図工、音楽、体育は1,2年生で合同学習しているほか、朝の会や給食も同教室で実施。）
- ・5,6年生が複式学級となるが、小規模校加配職員配置があるため、国理算英社は、学年別での指導が行えている。
- ・全学年で下校しているため、時間割に「待機」時間がある。（低学年の6時間目）
- ・PTA 活動については、入学時に6年間の役割を決める。コロナ禍を機に部会制を廃止し、奉仕作業も実施していない。そのため、教員負担は大きくなっている。PTA は、役員業務の他、広報紙作成や、会議の司会進行のみ担っている。
- ・五箇小学校は明治7年創立で、昭和45年から単学級となった。周辺は昔からの地域で学校に協力的である。

◇教育委員会からの常総市立小中学校適正配置実施計画説明

現状：児童生徒数の減少幅が顕著となり、単学級や複式学級のさらなる増加も予想される。

➡子どもたちの健やかな成長と豊かな人間性を育む場として、よりよい教育環境を整備し、充実した学校教育の実現に資するため、常総市立小中学校適正配置実施計画を策定

経緯：

○小中学校適正配置実施計画検討委員会（令和3年5月～令和4年3月）

実施回数：6回

検討内容：①長期的な視点での適正配置の方向性の検討

②小中学校保護者アンケート

③3年以内に統合を予定している小中学校のPTA、保護者、地域意見交換会

○常総市立小中学校適正配置実施計画（令和4年5月～）

	適正規模	適正配置
小学校	クラス替えが可能な各学校2学級以上となる12学級以上が望ましい	通学距離：徒歩でおおむね4km以内 通学時間：おおむね1時間以内
中学校	クラス替えが可能で、すべての教科の担任が配置できる9学級以上が望ましい	通学距離：徒歩あるいは自転車でおおむね6km以内 通学時間：おおむね1時間以内

◇その他【教育委員会】

- ・令和4年度に策定した「常総市立小中学校適正配置実施計画」により、令和4年を基準年とし、15年間で3段階に分け、市内14校の小学校を統廃合し、4校に減らすことを予定している。
- ・五箇小学校も、3段階目である令和19年度までに大生小学校、水海道小学校、三妻小学校と統合される予定。
- ・統合について、大きな反対はなく、子どもたちの教育環境を考えて早めの統合を望む意見もある。



常総市教育委員会からの説明



五箇小学校の校舎外観

つくばみらい市立富士見ヶ丘小学校（過大規模校）

◇視察内容

- ・学校紹介及び事前質問への回答
- ・校内視察
- ・意見交換

◇過大規模校であることのメリット、デメリット

	学校運営面	学習面	生活面
メリット	・教員が多いため、様々な指導法や意見を取り入れることができる ・若手の育成の場として有効 ・専門教員が多い ・クラス分けがしやすい ・教科や行事を分担して行える	・保護者の強みを教育課程に生かせる	・多様な人間関係の構築が図られる ・たくさんの人と触れ合うことができる ・気遣いを学ぶことができる
デメリット	・事務処理が多い ・情報共有が難しい場合がある ・パーソナルスペースが少ない ・特別教室や体育館等の綿密な計画が必要 ・校務分掌の負担が一部の職員に偏る	・児童の活躍の場が少ない ・学級間の進捗を揃えるのに時間がかかる	・全校児童での活動（集会等）ができない ・学年会等に時間がかかる ・大人数が苦手な児童にはプレッシャーがかかる ・児童間で名前が覚えられない

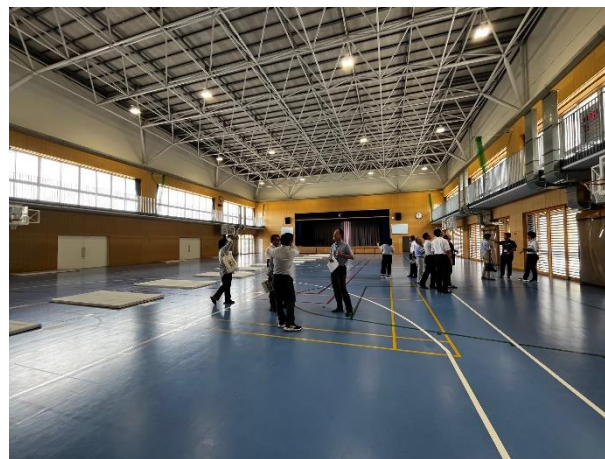
◇その他

- ・過大規模校を想定して建築された建物であるが、増築を実施している。
- ・運動会は平日２部制（１・３・５年、２・４・６年）で実施。
- ・体育授業は体育館で２クラス、校庭で２クラスを一度に実施。
- ・昼休みや業間休みは、１・３・５年、２・４・６年の２班をローテーションで校庭遊びしている。
- ・入学式、卒業式は、在校生の出席はなし。入学式の看板は、式の前３週間設置。
- ・隣接している高砂熱化学が体育館の空調設備を無償で提供してくれている。
- ・開門を７時５５分とし、一部の教員の勤務時間を７時５５分から１６時２５分に設定。

- ・PTA 総会は電子決議で、本部役員のみで活動を実施することで、負担減。
- ・登下校時の立哨は保護者ボランティアで実施。HP で地区割担当表を公開し、空いている曜日に自主的に登録・対応いただく形で運用している。



校庭の様子



高砂熱化学の空調が配備された体育館

●まとめ

過小規模校

- ・複式学級はデメリットが多いとの話から、小規模校の段階で、複式学級の発生を避ける取組を最重要事項とするべき。
- ・適正化対策を実施する際は、保護者や地域に十分な説明・周知を徹底し、円滑に進める。

過大規模校

- ・学校施設の大きさによらず、学級数が多いと活動に一定の制限がかかってしまうため、適正規模に近づけることが望ましい。
- ・過大規模校、大規模校においては、保護者、地域の理解と協力を得ながら、学校運営面で最大限の工夫を施し、児童生徒への影響を最小限に抑えることが必要。